
営業悪魔

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

営業悪魔

【Nコード】

N2189P

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

ボランティア活動なんてやる気はないが、金さえあれば、大勢の人を助けてやれるのに。そんな事を、ただ考えるだけの俺の前に、悪魔が現れた。奴は言う。大金を合法的に手に入れるお手伝いをし、てさし上げよう、と。そして、本当に手に入れた金を前に、悪魔は俺に選択を迫る。

人助けには金が必要。それが現実つてものだ。

優しさで腹が膨れるわけでもなけりや、一緒に汗水垂らして働く事で、病気が治るわけでもない。

人間が生きていくのに必要なのは、食料と水。そして、薬。医者もいなけりや話にならないし、医療行為を行える施設だって必要だ。俺は、別にボランティア精神に富んだ出来た人間じゃないが、時折そんなことを真剣に考える癖があつた。

そう、俺は考えるだけだつた。

海外の貧しい地域に赴いて、井戸を掘ったり農業を教えたりなんて行動を起こす気にはとてもなれなかつたし、俺の少ない蓄えからじゃ、募金つて言つたつてコンビニのレジの傍に置いてる箱に小銭を入れてやるのが関の山。

もし世界の名だたる富豪に並ぶぐらいの、俺が自由に使える金があつたとしたら——なんて考えながら、テレビに映るやせ細つた子供の幸運を祈るだけで精一杯だつた。

そんな俺に、悪魔が声をかけてきた。

「いや、実に素晴らしい、崇高なお考えをお持ちの方だ。私、悪魔だというのに、本当に心から感動してしまいました」

「はあ」

「是非、お手伝いをさせていただきたい。とは言つても、今ここに札束を用意しろと言われても困りますがね」

「あなた、悪魔だろ。魔法か何かで、パッと出せないのかよ」

悪魔は、やれやれと言つた風に肩を竦める。

「勿論出せないことはありませんがね、私が作るとなれば、それは偽札になりますし、どこかの銀行の金庫から本物の札束を盗つてくるとなれば、どこから足が付いて、あなたが盗人呼ばわりされるか解つたものではない」

「なるほどね……。じゃあ、なにを手伝ってくれるんだい。必要なのは金だよ」

「あなたは、企業のトップや富豪の元を訪れて、あなたの考えを述べれば良い。彼らはきつと、あなたの考えに賛同して、気前よくお金を出してくれることでしょう」

「俺なんか行っただって、門前払いされるだけだろ」

「そこで、悪魔の出番です。論より証拠、さっそくですが出かけましょう」

そう言って悪魔は俺を、とある有名企業の会長宅へと連れていった。

「大丈夫、誰もあなたを止めたりなんてしませんよ」

悪魔に促され、俺はインターホンを鳴らし、訪問理由を告げた。

すると、驚いたことに本当にあつさり中に通され、豪華な応接室で待ちかまえていたのはテレビで観た事のある会長その人。

俺は拙い言葉で、俺の考えを述べた。会長は、そんな俺の考えに時折ふんふんと頷きを返すだけで、具体的な事は何も言わない。

—— やっぱ、駄目だよなあ……。

だが、話終わった俺の前に差し出されたのは、一枚の小切手。そして、そこに書かれた数字を見て、俺は愕然とした。

「へ？」

「お若いのに実に立派だ。感服しました」

「はあ」

「おお、そうだ。私の友人たちを紹介しよう。彼らもきつと、あなたの考えに賛同してくれる筈だ」

そう言って会長は俺の目の前で何本かの電話をかけ、紹介状まで書いてくれた。

「ね、私が言った通りでしょう？」

「あ、ああ……」

会長が紹介してくれたのは、誰もが知ってる有名企業ばかりである。俺と悪魔はそれらの企業や自宅を次々と訪問し、最終的にはト

「タルで10億円分の小切手を手に入れてしまった。

「……すげえ」

小切手で良かった、というのが俺の心境だ。もし目の前に10億円分の札束が積み上げられていたら、俺の心臓はパンクしてたに違いない。

「ふむ、ひとまずはこれだけあれば充分でしょうな。で、どうします?」

「どうって……?」

「飢えに苦しむ子供たちを救うという崇高な使命に、この金を全て使うか」

「勿論、そのつもり——」

「あるいは私と契約を結び、私の力で今日会った方々の記憶を適当に操作した上で、誰に憚ることもなく、この大金を全てあなたの物にしてしまおうか。……さて、どうしますか?」

ホテルの一室に、名だたる企業のトップが集まって、悪魔を取り囲んでいる。

「ご協力に感謝します。皆様方の協力のおかげで実に素晴らしい契約を結ぶ事が出来ました」

中央に立つ悪魔は、そう言って優雅にお辞儀をした。

「なあに、君には散々儲けさせて貰ってるんだ、あれぐらいの金は投資だと思えば安いものさ。礼には及ばないよ」

「それに、我々も充分楽しませて貰ってるからねえ。ああいう輩の妄想じみた理想を打ち砕いて本性を露わにさせるというのは、まったく気分が良いものだ」

それに同調するように、皆が笑い出す。

悪魔は笑い声の中心で、彼らの顔を値踏みするように見つめながら、

——欲望、高慢、嘲り……良い具合に魂が腐り果ててきたものだ。
そろそろ、狩り時だな。
と、静かに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189p/>

営業悪魔

2010年11月30日07時39分発行